「危機への備え」

ルカ 22:35-38

2021.1.10　南与力町教会朝拝

序：最後の晩餐における最後の主の言葉

朝の礼拝ではルカによる福音書から学んでいます。イエス様はご自分が十字架にかかる前の夜、弟子たちの最後の晩餐を持たれました。ルカ福音書ではその最後の晩餐の席でイエス様が弟子たちに語られた様々な教えが記されています。それはイエス様が弟子たちに向けて語られた最後の説教、告別説教と言うこともできるでしょう。そして今日の箇所がその中の最後の教えです。

ここに記されている言葉はルカ福音書のみが伝えているものです。その意味でもあまり知られていない、あるいは知っていたとしても、あまり心に留められることのない言葉かもしれません。地味な御言葉とも言えるかもしれません。しかし福音書記者ルカはこのイエス様の言葉を、最後の晩餐におけるイエス様の最後の教えとして記しています。それほど重要なものとして記しているのです。それゆえ、私たちはここでイエス様が弟子たちに伝えようとされていることは何なのか、私たちが聞くべきことは何のか注意深く耳を傾けたいと思います。

１．主イエスの勧めと弟子たちの無理解

今日の箇所にはイエス様と弟子たちとの会話が記されています。まずイエス様が弟子たちに尋ねました。35 節

「財布も袋も履物も持たせずにあなたがたを遣わしたとき、何か不足したものがあったか。」

これはルカ福音書 10 章 4 節に記されているイエス様の言葉を前提としています。イエス様は弟子たちを宣教に遣わされる際、「財布も袋も履物も持って行くな」と命じられました。「財布」はお金をいれるもの、「袋」は食料などを入れる革袋のことです。また「履物を持っていくな」とは履物を履かず、裸足で出かけよということではなく（マルコ 6:9 参照）、予備の履物、すなわち草履がすり減って使えなくなったときの予備の草履を持っていくな、という意味です。お金を入れる財布も、食料を入れる袋も、予備の履物も、普通は旅に出かけるときには持って行くものだったでしょう。しかしイエス様は弟子たちを伝道旅行に遣わす際、そういうものを一切持って行くな、とお命じになったのです。ではお金も食料も予備の履物もなく、どうやって旅の間、生活していくことができるのでしょうか。イエス様はルカ福音書 10 章 7 節で次のようにおっしゃっていました。

「その家に泊まって、そこで出される物を食べ、また飲みなさい。働く者が報酬を受けるのは当然だからである。家から家へと渡り歩くな。」

すなわち旅先の町で誰かの家に泊まり、そこで出される物を食べ、飲みなさい、そのようにして生活の糧を得るよう弟子たちに指示されていたわけです。

そして今日の箇所で改めてイエス様は弟子たちに「財布も袋も履物も持たせずにあなたがたを遣わしたとき、何か不足したものがあったか」と尋ねておられます。

それに対して弟子たちは答えました。

「いいえ、何もありませんでした」

イエス様から言われた通り、財布も袋も履物も持たずに出かけたけれども、不足したものは何もなかった。すべての必要が満たされた。そのように弟子たちは答えたのです。
それに対してイエス様は言われました。36 節
「しかし今は、財布のある者は、それを持って行きなさい。袋も同じようにしなさい。剣のない者は、服を売ってそれを買いなさい。」

「しかし今は」とイエス様は強調して言われます。以前は財布や袋がなくても間に合っただろう、不足するものはなかっただろう。しかし今は、財布を持っている者は、それを持って行きなさい。袋も同じようにしなさい。そのように言われるのです。それはつまり弟子たちは以前のように人々からのもてなしを期待することができないことを意味しています。だから自分の財布、自分の食料袋が必要になるのです。
それだけではありません。イエス様は「剣のない者は、服を売ってそれを買いなさい」とも言われます。服すなわち上着は生きていくために必要なものです。貧しい人は寝るとき、上着にくるまって寝ました。ですから貧しい人の上着を質に取ったとしても、日没までには返すよう律法で定められていました（出 22:25-26）。しかしイエス様は、「今はその上着を売ってでも、剣を買いなさい」と言われるのです。「剣」とは「短い剣、短剣」のことで、護身用に使われました。そのような「剣」が切迫して必要になる、とイエス様は言われたわけです。

そしてその理由として 37 節で次のように言われました。
「言っておくが、『その人は犯罪人の一人に数えられた』と書かれていることは、わたしの身に必ず実現する。わたしにかかわることは実現するからである。」

ここで引用されている『その人は犯罪人の一人に数えられた』という言葉は、先ほど読んでいただきましたイザヤ書 53 章 12 節からのものです。いわゆる苦難の僕の預言です。イエス様はあの苦難の僕の預言は「わたしの身に必ず実現する」、「わたしにおいて実現されなければならない」と言われるのです。さらに「わたしにかかわることは実現するからである」と強調されています。ここで「実現する」と訳されています言葉はもともと「終わりを持っている、終わりの状態にある、終わりを迎えている」という意味があります。イエス様はここで「わたしに関わることは、終わりの状態にある。終わりを迎えている」と言われるのです。それゆえ「その人は犯罪人の一人に数えられた」という預言の言葉がイエス様において成し遂げられなければならない、完了しなければならないのです。
ではイエス様が「犯罪人の一人に数えられる」ようになるとどうなるでしょうか。弟子たちは「犯罪人の仲間」となるわけです。そうすると、人々が今までのようにイエス様の弟子たちを暖かく家に迎え、もてなしてくれることは期待できません。むしろ弟子たちは「犯罪人の仲間」と見なされ、憎しみや敵意を向けられる、さらには迫害されることが予想されるわけです。それゆえイエス様は弟子たちに「しかし今は、財布のある者は、それを持って行きなさい。袋も同じようにしなさい。剣のない者は、服を売ってそれを買いなさい」と言われるのです。それは弟子たちにこれから襲い掛かろうとしている苦難や危機に弟子たちが備えるようにというイエス様の呼びかけです。しかし弟子たちはこのイエス様の言葉を文字通りの意味で理解し、こう答えました。

「主よ、剣なら、このとおりここに二振りあります」。

それに対してイエス様は「それでよい」と言われました。「それでよい」とは「それで十分である」という意味の言葉です。しかしこの時、弟子たちは 12 人いたわけです。ユダが既にいなかったとしても 11 人です。一人一人が剣を買って持っておくべきであるなら、二本ではとても足りないはずです。しかしイエス様は「それで十分だ」と言われました。このことはイエス様が言われた「剣のない者は、服を売ってそれを買いなさい」という言葉が、文字通りの意味ではなく、比喩的な表現であったことを示しています。

この後のところを見ていくと、そのことはさらにはっきりします。22 章 49 節以下のところですが、イエス様が逮捕されようとしたとき、弟子たちは「主よ、剣で切りつけましょうか」と言いました。そして弟子の一人は持っていた剣で大祭司の手下の右耳を切り落としたのです（ルカ 22:51）。しかしイエス様はそれに対し「やめなさい。もうそれでよい」と言われ、その人の耳に触れていやされました。このようなイエス様の言動からも、イエス様は実際に弟子たちが剣を取り、それで戦うことを望んではおられなかった、ということがわかります。今日の箇所で「剣のない者は、服を売ってそれを買いなさい」と言われた言葉は、文字通り剣を買いなさいということを言おうとしたのではなく、来たろうとしている戦いや危機を弟子たちが覚悟し、それに備えるように、ということを比喩的に語った言葉だったのです。しかし弟子たちはそのことがわからず、「主よ、剣なら、このとおりここに二振りあります」と言わばとんちんかんな答えをしている。ここにもイエス様が言おうとしていることを十分に理解できない弟子たちの鈍さ、鈍感さが示されています。

２．私たちにとっての意味―戦いへの覚悟と備え

今日の御言葉は私たちにとってどのような意味があるのでしょうか。イエス様が「しかし今は」と言われた時から 2,000 年以上経った時代に私たちは生きています。イエス様の十字架の死は歴史的に言えば私たちから遠い昔の出来事です。では今日の箇所でイエス様が弟子たちに語られている警告の言葉は私たちには全く関係のないものなのでしょうか。そうではないのだと思います。

敬愛する岡數太兄は地上で信仰を守り抜き、天に召されてゆきました。岡兄は当教会の 70 周年記念誌に文章を書かれていますが、今朝もその一部を読ませていただきたいと思います。この文章の題名は「松井長老と私」です。松井長老とは南与力町教会の元長老であった松井孝春長老のことです。召天者名簿の二番目に記されてあります。松井長老は三本松伝道所で長く奉仕をされた松井證（あかし）先生のお父さまに当たります。この松井長老は安芸の「森派」と呼ばれるキリスト教会に通われ、受洗されました。そして昭和 16 年（1941 年）の 9 月、森派の教会は戦時体制下において天皇崇拝や神社参拝を偶像礼拝として拒否したため、迫害を受け、主だった人々が捕らえられ、投獄されました。その中に松井長老もいたのです。ある信徒は懲役二年の実刑を宣告され、刑に服しました。一方、松井に長老は 7 か月ほどで釈放されています。

岡數太さんが清和の教員をされていた頃、松井長老がご自宅で夕食をごちそうしてくださったということです。すき焼きをご馳走になり、コーヒーを飲んでいる時、松井長老は岡さんに対し「今ある縁談のことは考えずに淳子さんと結婚しなさい」と言い始めたとうことです。当時、淳子さんとは別の方との縁談の話が數太さんのところに来ていたようです。岡さんはその時のことを振り返って次のように記

されています。
「当時、妻は高知高専に勤めており、その近くに下宿しておりました。しばらく個人的には会っていませんでしたから縁談の話に心が動いていたのは事実です。それを松井長老がどこで察知したのかは分かりません。松井長老は森派事件で身柄が拘束されていたころの話を始められました。身柄を拘束された当初は喜んで闘うつもりでしたが、面会に来る度に奥様がやつれてくることに耐えられなくなったとのことでした。六か月過ぎた頃、反省文を書いたところ一か月後には釈放されたそうです。それが人生の痛恨事だとおっしゃるのです。「淳子さんならしっかりしているから充分闘える」とおっしゃるのです。一瞬、ヤクザでもあるまいし、刑務所に入ったときのことまで考えて結婚しなければならないのかと思ったのですが、今、この時、この人に、このことを伝えなければとの使命に燃えていた松井長老の言葉には説得力がありました。それは私の結婚観を根底から覆すものでした。好いた、惚れた、腫れたで結婚するものではないのだということを知らされたのです。それと信仰にはいつ身柄を拘束されてもそれと闘う緊張感と覚悟が必要なのだということも知らされました。」
　こうして岡數太さんは南与力町教会の青年会で一緒に活動し、高知大学でも聖書のサークルで一緒だった淳子さんと結婚することを決意なさったのでした。

　岡さんは実際には投獄されることはなかったでしょう。しかし、清和の教員として、また裁判官として働かれる中で信仰を持っているがゆえの様々な戦いや困難があったのだと思います。その中で岡さんは松井長老を通して教えられたこと、すなわち「信仰にはいつ身柄を拘束されてもそれと闘う緊張感と覚悟が必要なのだ」ということを心に留めて、そのような覚悟を持ちながら信仰の旅路を歩み抜かれたのだと思います。

　このようなことを考えていきますと、今日の箇所でイエス様が弟子たちに勧めている言葉、「しかし今は、財布のある者は、それを持って行きなさい。袋も同じようにしなさい。剣のない者は、服を売ってそれを買いなさい」という言葉は、決して私たちと無関係なものではないことを思わされます。私たちは今、信仰のゆえに直接的な迫害や弾圧を受けているわけではないかもしれません。しかし私たちはクリスチャン（キリスト者）がいつも世の人々から好意をもって受け入れられるとは限らない、ということをわきまえておく必要があります。むしろ、私たちの主であるイエス様が「犯罪人の一人に数えられ」なければならなかったように、私たちキリスト者も人々からそのように白い目で見られ、敵意や憎しみを向けられることがあり得るのです。私たちはできればそういうことは起こってほしくない、信仰の故に迫害など受けたくないと願います。それ自体は当然でしょう。しかし、私たちはたとえそのような苦難や危機が襲ってきたとしても、それに立ち向かい、戦う覚悟と備えをしていなければならないのです。イエス様が今日の箇所で「剣のない者は、服を売ってそれを買いなさい」と言われたのは、そのような覚悟を備えを今しなさいということを意味していたのではないでしょうか。私たちは平和で平穏な時、キリスト教が人々から好意的に受け入れられる時だけクリスチャンでいて、迫害が起こればクリスチャンを止める、あるいは信仰を捨てたり信仰を曲げたりするということではいけないわけです。イエス様が今日のところで教えておられるように、私たちは平和で平穏な時だけでなく、信仰のゆえに危機や迫害、苦難が私たちを襲いかかる時に備えていなければならないのです。そのような状況にあっても、信仰の闘いを戦い抜くために備えをしていなさい。そのことをイエス様は弟子たち、また私たちに

求めておられるのです。

なぜそのような苦難が起こるのでしょうか。それは私たちの主であるイエス様において『その人は犯罪人の一人に数えられた』という言葉が実現したからです。なぜそのようにならなければならなったのでしょうか。イエス様は決して犯罪を犯したわけではありませんでした。それにも関わらずなぜ「犯罪人の一人」に数えられなければならなかったのか。その理由はイザヤ書 53 章にはっきりと示されています。イザヤ書 53 章 11 節 12 節をお読みいたします。
「彼は自らの苦しみの実りを見／それを知って満足する。わたしの僕は、多くの人が正しい者とされるために／彼らの罪を自ら負った。それゆえ、わたしは多くの人を彼の取り分とし／彼は戦利品としておびただしい人を受ける。彼が自らをなげうち、死んで／罪人のひとりに数えられたからだ。多くの人の過ちを担い／背いた者のために執り成しをしたのは／この人であった。」

イエス様が罪のないお方でありながら、「罪人のひとりに数えられ」なければならなかったのは、私たちの罪と過ちを代わりに負い、それを償ってくださるため、そうして私たちが神様の前に正しいものとされ、救われるためでした。私たちはすでにイエス様の十字架による救いと平和があたえられています。イエス様の十字架の愛によって守られています。そして誰もこのイエス・キリストの愛から私たちを引き離すことはできません。それはパウロが「だれが、キリストの愛からわたしたちを引き離すことができましょう。艱難か。苦しみか。迫害か。飢えか。裸か。危険か。剣か。」（ローマ 8:35）と言っている通りです。このような変わることないイエス様の愛の中に守られているがゆえに、私たちは艱難や苦しみや迫害や危険の中にあっても、イエス様への信仰を守り抜くことができる。またそうできるよう、信仰の戦いや艱難に備えていなさいとイエス様は私たちに呼びかけておられるのです。

パウロは世を去る前に、次のように語ることができました。第二テモテ 4 章 6 節 7 節
「わたし自身は、既にいけにえとして献げられています。世を去る時が近づきました。わたしは、戦いを立派に戦い抜き、決められた道を走りとおし、信仰を守り抜きました。」

私たちも、世を去る時まで、「戦いを立派に戦い抜き、決められた道を走りとおし、信仰を守り抜く」ことができるよう、今という時に覚悟と備えを携えて歩んできましょう。